

# 天 界

第百十四號 (第十卷) 昭和五年十月

## 創 立 滿 十 年

(山 本 一 清)

わが天文同好會が創立されてから今や十年を経た。會の内外を見渡して、いろいろ思ひ出すことが多い。十年前の、大正九年九月二十五日、京都帝國大學學生集會場で發會式を舉げた時は、天文などといふことは、殆んど世間に知られてゐない時代であつたけれど、一般社會そのものも、一種もの淋しい無聊の世の中であつたと見え、只一回の短かい新聞記事であつたに拘らず意外に多くの人が遠近から集まれて、發起人たちをまごつかせた。其の時は、新城博士の「天文學の使命」といふ講演と、百濟理學士の「海王星外の遊星」といふ講演とがあつたが、十年後の今日は、既に超海王星の實物が發見せられ、其の位置と軌道も確定されて了つたのだから愉快である。(超海王星と我が同好會とは、こんなわけで、創立當初から、切つても切れない縁がある。「今後も宜しく願ひます」と、星が御挨拶してゐるのぢやないかといふ氣がする!)

同好會は創立後の反響もすばらしくて、毎日二三十通の入會申込みは必ず到着した。半年も立たないうちに千を越えるらしい景氣で、何としても盛んなものだつた。會は、創立の宣言(天界第一號)にもある通り、時代のスローガンを其のまゝ探つて、デモクラシーの會とし、會長の名を用ゐず幹事を置いたのみであつた。又會の規則は成るべく簡明に、且つ其れは口語體であつた。口語體の規則などと言ふものは今日だつて殆んど見當らない。同好會が初めから如何に尖端的であつたかを知つて頂きたい。創立後

半年たつた時に、會は大阪の市民博物館で天文展覽會の新レコードを作つた。之れは表面上は市民博が京都帝大の後援で遂行したやうにも思はれたが、知る人ぞ知る、實は同好會の事業であつたと言へる。其の證據に、其の展覽會の開期中に、會場内で、我が同好會は臨時總會を賑々しく開いた。天井からぶら下げた太陽系の模型と、諸星座を圓天井に植え付けた大天球模型とは此の展覽會の作つた創作であつたが、此の二つが一つのものに組み合はせられて出来上つたものが、今のツアイス會社の所謂プラネタリウムであるんだから豪勢ではないか！此の時から、漸く「天文展覽會」だの「空の博覽會」だのと云ふものが、世間に行はれるやうになつた。

次いで、創立滿一年の年末から「ブレテン」といふ新機軸の出版物を發刊した。これには會の外部は勿論、會の内部の人々も、啞然として、開いた口が塞がらないほど驚いた向きもあつた。今になつて見ると、「ブレテン」の價値や意義は世人によく知られてゐるが、吾人が之れを發刊した時の大膽さと先見とを察して頂きたい。會は又、創立滿二年の頃から、三澤氏の献身的努力によつて、太陽黒點の連續觀測を始めた。之れなども舊式者流どもは初め嘲笑してゐた。しかし、今となつて見ると、三澤氏の觀測はもはや世界的になつて了つたぢやないか！ キリアム・ハーシエルの名を吾が國に初めて紹介したのも本會だ、又、「日本では、觀測を勵まなくてはならない」との主張をしたのも本會であるし、之れをすぐ「實行」に移して、「觀測部」を作つたのも本會だ。中村氏やスコフィールド氏等が火星の觀測を國際的に始めたのも、元より兩氏の奮勵によること言ふまでもないが、同好會は之れを會員中に持つ誇りを感じて好いではないか！。

まだある。月刊雑誌の左り横書きを本會で始めたのは今から五年前であるが、之れは餘りに時代を生き走り過ぎて、今でも之れを見習ひ得ない保守主義者が如何に世間には多いことよ！しかし、大勢の趣く所、今後幾年かの後には皆の出版物が我が「天界」を見習ふこと火を見るよりも明らかである。徹底した「民衆天文臺」は、之れも亦、今なほ世間が追従し得ない我が同好會の誇りである。倉敷の市（まち）は本會の天文臺を以つて偉大なる誇りとしてゐる。一年に一萬人以上の人を吞吐する天文臺は、日本は愚か、

外國にも十指を屈するに足りない。反射望遠鏡が日本に今日の如く普及したことも同好會の力である。事實、今日の日本に反射鏡を持つてゐる人は、殆んど我が同好會員ばかりである。最後に(もう之れ位でよさう!)純粹に天文のグラフィック式な雑誌を發刊したレコード・ホルダーも我が同好會である。そして、世間は今之れをしきりに眞似したがつてゐる。

あへて本會の自慢ばかりを數へ擧げる目的ではなかつたけれど、全く無風状態であつた我が國の社會に、天文の興味と學理とを確實に植え付けたことが、即ち我が同好會の十年史であるものだから、止むを得ず、筆が這つたわけである。しかし、又、一面から見ると、我が同好會にも苦い經驗はある。「もはや此れまで」と思ひつめて、切腹しやうと決心したことが二度ばかりあつた。けれど、幸ひに今まで、世間の篤志な人々の温かい同情と、貴い努力とによつて、今日までは生命を維持して來た。

今後の十年は? 否、今後の五年さへ、全く將來の運命は不明である。考へやうによると、今にもつぶれさうな危機を孕んでゐるとも言へる。其れは主として會の財政的方面だ。本會は創立の最初から、溢れんばかりの計畫と、ハチ切れんばかりの熱とを以つて、其の日々々々、カーバイの仕事をして來た。それがために財政上の餘裕は常に見られなかつた。今だつて若干の缺損を負つてゐる。しかし、尙ほ胸中に持ち合はせてゐる計畫と理想とを思ふと、何としてもじつとしてはゐられない。

夢のやうではあるが、今後、いのちをかけて、いろいろの新方面を開拓して行きたい。創立二十年を迎へる日に祝福あれ!!

## 花山天文臺創立滿一年記念日

〔京都天文學會員に告ぐ〕

- 時 日 昭和五年十月十七日 朝から晩まで
- 午 前 中：花山に集合。構内縦覽。歡談。遊戲。
- 正 午：宿舎81號室にて記念午餐會。
- 午後<sup>2時より</sup><sub>4時まで</sub>：「過去一年間の業績」, 各自發表。
- 午後5時 半：軽い晚餐。
- 午後7時より：天體觀望。隨時散會。